

稲福マサさん

1927(昭和2)年10月10日生まれ

沖縄県大味宜村字根路銘

所属 梯梧学徒隊

(私立昭和高等女学校)

第62師団野戦病院

戦地 新川(ナゲーラ壕、南風原町)

～識名(那覇市)～米須(糸満市)



●1945(昭和20)年3月6日 第62師団野戦病院に入隊

2月下旬に友達が部隊に入ったらしいよと聞いたので、私は親の反対を押し切って行きます。「行くな」って言うから「戦争来るまでに卒業するから」って言うので、「いや戻す」と言ってるので「帰ってくる」と親を騙して行きます。後で入隊したということを知り、父が連れ戻しに来たらしいです。その時寮母さんたちは「いるんだけど、どこの部隊にいるか分からん」ということで、そのまま帰るとのことです。

●1945(昭和20)年4月17日 ナゲーラ壕から識名へ移動

激戦があって、もう、どんどん負傷兵が入ってきて、そこ(ナゲーラ壕)が、いっぱいになってしまったんですよ。収容が出来ないので、識名の方に移ったんです。この自然壕は奥へ入ったら絶対に死なないという気持ちになります。ものすごく厚みがあって、中に入ると、こんな安全で良い所って感じで「ここは極楽」と皆言っていたんですよ。前方には、ゆうな木があって、出るとナシが全部見えたの。あんまり高い山もなく、石もあるし、庭みたいな所でした。木も生えているし、庭を作っているみたい。だから、ここに来たら絶対死なないって思っていたんだけど、あとは地獄と同じなんです。

友達の犠牲者は2人だね。入り口の近くに上の方に穴があいてるのね。穴から破片が落ちたの。爆弾の破片が落ちた所に手榴弾を置いていたんです。自分たちのですね。その手榴弾が爆発して死者が出たんですよ。1人はね、私の隣りに寝ている前川さん。腹部に手榴弾のあれが当たったんですよ。私の左に寝てた饒波さんは顔も体もほとんどやられて、30分くらいで、亡くなったんです。私も真真中に寝ていたら私もやられていました。なんとなく、お友達と着物を交換してから、まだ寝たくないからって炊事場の方に行ったので助かったの。「あの時寝てたら大変だったね」「運が良かったね」とよく言われるの。

兵隊達はみんな「食事まだか」「ウジ虫取ってくれ」とか叫んでいるんです。最初のころは、やってみましたけど、やっつけられない。患者が、あまりにも多く入って来て、人手があまりなくて、私たちの班は、せいぜい10人ですから、間に合いません。他の班を入れて15名くらいですから大勢の看護は出来ません。

兵隊たちが「治療に行くから、後ついて来い」と言うのでついて行きました。灯持ちをして私はついて行きました。最初、治療した人は、手を切断しているんです。その包帯を当てているのを解いたんです。こうやって巻いてこのくらいの塊がこちらの板に落ちたんです。何だろうと思って見たらウジ虫なんです。切断した肩の所にウジ虫が膿を吸うでしょう。ですからその人の肩がウジ虫がとれてくぼみが出来ているの。

顎をやられた人もいました。この人はおにぎりやる時、起きないんですよ。「顎やられてるんですよ。おにぎり食べられませんか。おかゆにします。」と言って、この人のおにぎり持って行っておかゆにしたんです。けっこう、おかゆも食べる気になる。あとはガーゼで濾してぎゅっとしぼってやって「これなら飲めるでしょ」と言って、リングルもらって来て管を食道まで通して飲ませたんです。この人は久しぶりに食べ物が胃の中に入ったという気持ちがあったんでしょうね、とても安心した様子で、後で、「有り難う」と首をうなずかせていたんです。(この人とは、戦後再会)

●1945(昭和20)年5月29日 米須に移動～南部彷徨

あの頃、雨が降らなくてね、水が無いでしょ、今、平和の礎のある摩文仁の排水溝に隠れていて、皆が出て行ったの知らないで隠れていたのよ。「もう、近づいているんだね、死んでも、捕虜にはならないでおこうね」って相談していたんです。ところが、4名に1人は看護婦でした……長崎のビーバー(?)って言ってたあの人間、今でも生きているかなあ、朝鮮の人も何名だったかな……その人がビールをもって来たわけ。「これに、こんなしてあるよ。危害を加えないって」って言うんです。午後になって、「出て来い、出て来い！」って言うんです。「絶対、出ない！絶対、出ない！」って言ってたら、「出て来ないと殺すぞ！」って、アメリカ軍が言ったの、その時、朝鮮のグループが最初に出たのよ。その時も……私達もあんまり「出て来んと殺すぞ」と言われて、殺されるのはいやだから、とうとう、出て行ってね。

(取材日:2011年2月4日)